

TheSTYLE / Fashion



パナマ帽から靴まで、さわやかにコーディネートした須磨久善さん。院長を務める東京・代官山の須磨スクエアクリニックで

「ドクター！スママといえば、世界初の胃大腸動脈を用いた運動療パイクス手術を成功させた心臓外科医として、国際的に知名度の高い存在だ。日本初のパイクス手術でも知られ、その業績は、テレビ番組などでよく紹介されている。

そんな経歴を持つ須磨久善さん(88)と帽子とききは、凄くいい手術帽姿を思い出すが多いかもしれない。だがオタクタイムの須磨さんにとつておしなべて帽子は、暑さ寒さを防ぐ以上の必需品でもある。

きっかけは、ちょうど30年前、先輩の医師から、当時皇室の帽子なども手掛けていた帽子作家の平田聡夫さんを紹介されたことだ。『ちょうどぼくが、海外の学会や講演に出かける機会が多くなり始めた時、平田先生から『海外では紳士として帽子をかぶっているかいいか、で、人の見る目が違うよ』といわれましてね。」

すすめられるままにすべてが手作りという平田さんの帽子を試してみると、見た目より軽くてかぶり心地がよく、意外にサマになった。実際に欧米のホテルやレストランでは一目置かれるという感じで、誰かに扱いが違いましたね。

国際学会などでも、須磨さんにび

手放せない紳士のアイテム

須磨さん愛用のパナマ帽とフト帽の中にも出番の多いものたち。使い込んだ形が美しい。



つたりの帽子は羨望の的とならば、つと拝借か、ともらしてもいいかい？と、取り上げられることもしばしばだが、また次を探したり、オーダーしたりするのを楽しみ、進呈してしまつたが須磨流のため手元にある帽子はいつも5個くらいだとか。

須磨さんはローマカトリック大学の教授として2年間イタリアで暮らした経験があり、海外出張も多い。そのため中関ありには、世界時に有名なブランドの帽子店にいろいろ試してみた。ところが基本的には欧米人とは頭の形が違うせいか、いずれもしっくりしなかつたり重かったり。結果的にこの30年間、東京・西麻布にある「オートモト平田」の帽子ばかりを愛用し続けている。

しかも、種類は、夏目漱石が内田百閒など多くの文人が愛したことで知られるいわゆる中折れ帽だ。男性の帽子の形としては定番でもある素材は、秋冬用はフトフェルトが多いが、春から夏にかけてはエクアドルなど中南米産のパナマ草の繊維をさらし編んで作るパナマが多い。

形がシンプルなのに、須磨さんの素材やデザインへのこだわりは強い。微妙な色調、つばの広さ、そして

リボンの細色、柄などについては、時に繊細な感じのもの、時に大胆なものを選ぶ。オートモト平田の二代目石田欧子さんは、須磨先生は、長身でさうとうといますし、頭の形もあまり横広でないで、帽子がよくお似合いです。なにより洋服とのコーディネートセンスが抜群です。とほめる。

最近、欧子さんが京都で開いた帽子の店舗では、和服にソフト帽姿の老舗の主人たちの姿が目立ったという。東京でも若手経営者などに帽子愛好家が増えてきている。須磨さんは、気晴らし感が魅力なので、正語る一方で、慣れて一体感が出るまでには、場数を踏むことが大事とも。

文芸評論家で日本人の帽子の著者でもある樋口覚さんは、帽子というものは、それぞれ自体持つ不思議な力によって、瞬間不思議な効力を発揮する。と語っている。帽子歴30年の須磨さんにとって、いま改めて帽子とは、「頭にホンのせると、また自分から、自分の自分の自分が垣間見えたり、自分がいまここをたがって、いるか、どういふ状態なのかが見えてきたりする。秘密の扉ですね。」

ファッションジャーナリスト 堀江瑠璃子

帽子に宿る不思議な魅力